法律相談 R4 42

戦後70年談話の原点にあるべきもの
――静かなる慰霊の気持ち

髙橋 司 たかはし・つかさ
弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「髙橋・日浦法律事務所」代表。

平成27年2月19日、菅義偉官房長官は、戦後70年の談話について議論をする有識者会議のメンバー16人を発表した。この有識者会議の中で報告書がまとめられ、政府はその報告書を談話作成にあたって参考にすると報道されている。

ところで、昨今、安倍晋三首相が歴史修正主義者であると非難され、その懸念を払拭すべきであるとの意見を述べる政治家も少なくない。通俗的な用法としての歴史修正主義とは、客観的な歴史学の成果を無視し、都合の良い過去は誇張やねつ造をしたり、悪い過去は過小評価や抹消したりして自らのイデオロギーに従うように過去を修正する考え方のことであるが、安倍晋三首相が歴史修正主義者ではないかとの懸念が払拭できなければ、冷え込んでいる日中関係や日韓関係がさらに悪化して日米関係へ波及してしまうとの意見がなされているのである。

ところで、天皇陛下は長い時間をかけられて慰霊の旅を続けられてきた。戦後70年にあたる平成27年の4月8日、9日、天皇皇后両陛下は、かつて我が国の統治下におかれ、昭和19年9月15日から同年11月25日までのわずか70日あまりの間に日本軍約1万人、米軍約1700人の戦死者を出したペリリューの戦いがあったパラオ共和国を訪れ、日米両国の全ての戦死者とその家族、パラオの人々のことを深く偲ばれた。ペリリューの戦いで最後まで戦って生き残った日本兵はわずか34名であった。

このような天皇陛下の慰霊の旅はそれ以前から始められていた。天皇陛下が皇太子時代の昭和56年8月7日、「日本では、どうしても記憶しなければならぬことが4つある」と述べられ、その4つとは、終戦記念日（8月15日）、広島原爆の日（8月6日）、長崎原爆の日（8月9日）と沖縄戦終結の日（6月23日）であると説明されている。そして、最後の最後まで沖縄訪問を念願されていた昭和天皇のご遺志を受け継ぎ、平成5年4月23日、歴代天皇として初めて沖縄ご訪問を果たされた。また、翌平成6年2月12日には硫黄島をご訪問され、さらに、終戦60年にあたる平成17年6月28日、北マリアナ諸島のサイパン島をご訪問され、日本人自決者総数1万人にも上るといわれているバンザイクリフ先端に立たれ、黙祷を捧げられてきた。

天皇陛下は、サイパン島ご訪問にあたり、「食料もなく水もなく、負傷に対する手当てもない所で戦った人々のことを思うとき、心が痛みます。亡くなった日本人は5万5千人に及び、その中には子どもを含む1万2千人の一般の人々がありました。同時に、この戦いにおいて、米軍も3千5百人近くの戦死者を出したこと、また、いたいけな幼児を含む9百人を超える島民が戦闘の犠牲になったことも決して忘れてはならないと思います」、「この度、海外の地において、改めて、先の大戦によって命を失ったすべての人々を追悼し、遺族の歩んできた苦難の道をしのび、世界の平和を祈りたいと思います」と述べられている。かかる天皇陛下の言葉は、日本人全体の戦没者が310万人の中で、外地で亡くなった人数が240万人にも達していることを踏まえたお言葉であると考える。

そして、今般のパラオ共和国ご訪問にあたり、天皇陛下は、「終戦の前年には、これらの地域で激しい戦闘が行われ、幾つもの島で日本軍が玉砕しました。この度訪れるペリリュー島もその一つで、この戦いにおいて日本軍は約1万人、米軍は約1700人の戦死者を出しています。太平洋に浮かぶ美しい島々で、このような悲しい歴史があったことを、私どもは決して忘れてはならないと思います」と述べられている。

サイパン島においても、パラオにおいても、天皇皇后両陛下が頭を垂れて慰霊をされているお姿の中に、長い時間をかけて並々ならぬ決意の中、慰霊の旅を実現してきたお気持ちが顕れていると感じたのは私だけではなかったと思う。

平成27年4月30日、安倍晋三首相は、米国上下両院合同会議にて、集団的自衛権を柱とする新しい安全保障法制を平成27年夏までに成立させる決意を表明した。日本人が「喉元過ぎれば熱さを忘れる」民族であると言われぬよう、天皇陛下のお言葉を一人ひとりが噛んじるほど噛みしめるところから始めてもいいのではなかろうか。